

## 安全データシート

---

**【製品名】** フルオロカーボン152a

---

### 問い合わせ先

大阪地区（大阪・奈良・和歌山）  
大阪支店  
電話番号：06-7637-3290  
FAX：06-7637-3576

京滋地区（京都・滋賀）  
京滋支店  
電話番号：077-511-3720  
FAX：077-524-6116

神戸地区（兵庫）  
神戸支店  
電話番号：078-672-1181  
FAX：078-672-1141

四国地区（愛媛・香川・高知・徳島）  
四国岩谷産業(株)  
電話番号：087-746-3536  
FAX：087-745-2738

## 安全データシート

### 1. 化学品及び会社情報

化学品の名称（製品名） : フルオロカーボン152a

会社名 : 岩谷瓦斯株式会社  
住所 : 〒660-0842 兵庫県尼崎市大高洲町10番地  
担当部門 : 環境保安部  
電話番号 : 06-6409-1175  
FAX番号 : 06-6409-1176  
緊急連絡電話番号 :

奨励用途及び使用上の制限 : カーエアコン、ルームエアコン、パッケージエアコン、電気冷蔵庫、各種冷凍機の冷媒

整理番号 : SF-09

### 2. 危険有害性の要約

#### 【GHS分類】

物理化学的危険性

可燃性又は引火性ガス : 区分1(シンボル:炎、注意喚起語:危険)

高圧ガス : 液化ガス(シンボル:ガスボンベ、注意喚起語:警告)

健康に対する有害性

特定標的臓器毒性(単回ばく露)  
: 区分3(麻酔作用、シンボル:感嘆符、注意喚起語:警告)

※上記で記載がない危険有害性は区分外、分類対象外又は分類できない。

#### 【GHSラベル要素】

絵表示又はシンボル



注意喚起語 : 危険

危険有害性情報 : 極めて可燃性又は引火性の高いガス。

: 高圧ガス;熱すると爆発のおそれ。

: 眠気又はめまいのおそれ。

注意書き

安全対策

: 使用前にガス関連機器の取扱い説明書を入手する。

: すべての安全注意項目を読み理解するまで取り扱わない。

: 屋外又は換気の良い場所でのみ使用する。

: 周辺での着火源(高温物、火花、裸火、電気を含む火気等)の使用を禁止する。  
- 禁煙。

: 防爆仕様の機器を使用する。

: 静電接地を行う。

: 革手袋、保護衣、保護眼鏡、保護面を着用する。

応急措置

: 漏洩ガス火災の場合は、漏洩が安全に停止されない限り消火しない。安全に対処できるならば着火源を除去する。

- 保管  
廃棄
- : 漏洩した場合は、換気及び大気拡散を実施すると共に滞留させない。
  - : 凍った部分をぬるま湯で溶かす。
  - : 凍傷部はこすらずに医師の治療を受ける。
  - : 日光から遮断し、換気の良い場所で保管する。
  - : 大気中への放出を避ける。都道府県知事の許可を受けた専門の廃棄物処理業者に業務委託する。

GHS分類に該当しない他の危険有害性

- : 窒息性、凍傷。

重要な徴候及び想定される非常事態の概要

- : 高濃度のガスを吸入すると、一呼吸で意識を失う。この状態が継続すると死に至る。
- : このガスが大量に漏洩すると、火災・爆発が発生するおそれがある。
- : 液化ガスに直接接触すると、凍傷の危険がある。眼に入ると失明のおそれがある。

### 3. 組成及び成分情報

- 化学物質・混合物の区別 : 化学物質(単一製品)
- 化学名又は一般名 : 1,1-ジフルオロエタン
- 別名 : フルオロカーボン152a
- 化学特性(分子式) :  $C_2H_4F_2$
- (構造式) :  $CHF_2CH_3$
- CAS番号 : 75-37-6
- 成分及び濃度又は濃度範囲(含有率) : 99.5%以上
- 官報公示整理番号(化審法・安衛法)
- 化審法 : (2)-86
- 安衛法 : 対象外

### 4. 応急措置

- 吸入した場合 : 高濃度のガスを吸入した場合は、新鮮な空気のある場所に移し、衣服をゆるめ毛布などで暖かくして安静にさせる。
- : 気分が悪い時は、医師の治療を受ける。
- : 呼吸が弱っていれば、酸素吸入を行う。
- : 呼吸が止まっていれば人工呼吸を行い、医師の治療を受ける。
- 皮膚に付着した場合 : 凍傷を起こす。凍傷部分をこすってはならない。
- : 凍傷部分を多量の水で温め、医師の治療を受ける。
- : 凍傷を起こした部分の衣服が凍り付いて取れない時は、無理に取らないで、その他の部分のみ衣服を切り取る。
- 眼に入った場合 : 多量の水で洗い、直ちに医師の治療を受ける。
- 飲み込んだ場合 : 口をすすぐ。
- : 「吸入した場合」に準ずる。
- 急性症状及び遅発性症状の最も重要な徴候症状
- : 高濃度のガスを吸入した場合は、酸素欠乏が起こり窒息の徴候(呼吸数増加、疲労感、めまい)があらわれる。また、麻酔作用(眠気・めまい)があらわれる。

- : 液化ガスに直接接触すると凍傷の危険がある。
- : 液化ガスが眼に入ると失明の危険がある。
- 応急措置をする者の保護 : 液化ガスが漏洩又は噴出している場所では、空気中の酸素濃度の低下及び火災・爆発の可能性があるので換気・散水を行い、必要に応じて陽圧式空気呼吸器を着用する。また、皮膚に付着させないように保護具を着用する。
- : 消火器等を準備する。

## 5. 火災時の措置

- 消火剤 : 散水、噴霧水、粉末消火剤、泡消火剤等。
- 使ってはならない消火剤 : 棒状注水。
- 火災時の措置に関する特有の危険有害性
  - : 極めて可燃性又は引火性の高いガス。
  - : 容易に着火するおそれがある。
  - : 火災によってフッ化水素、フッ化カルボニル等腐食性の有害なガスを発生するおそれがある。
  - : 容器が火炎にさらされると内圧が上昇し、安全装置が作動し、ガスが噴出する。
  - : 火勢により容器の内圧上昇が激しい時は、破裂に至ることもある。
  - : 破裂した容器は飛散するおそれがある。
- 特有の消火方法
  - : 関係者以外は安全な場所に退避させる。
  - : 風上から水を噴霧して、容器を冷やししながら周囲の消火を行う。
  - : 周辺火災の場合は、容器を安全な場所に移動する。
  - : 安全に対処できるならば着火源を除去する。
  - : 消火すると漏洩したガスが滞留、爆発を起こし被害を拡大させるおそれがある時、周辺に噴霧散水しながら容器のガスが無くなるまで燃焼させる。
  - : 消火後も、大量の水を用いて容器を冷却する。
- 消火を行う者の保護
  - : 耐火手袋、耐火服等の保護具を着用し、火災からできるだけ離れた風上から消火にあたる。
  - : 必要に応じて、陽圧式空気呼吸器を着用する。

## 6. 漏出時の措置

- 人体に対する注意事項、保護具及び緊急時措置
  - : 直ちに、全ての方向に適切な距離を漏洩区域として隔離する。
  - : ガスが拡散するまで関係者以外の立入りを禁止する。
  - : 窒息の危険を防止するために、換気を良くし、ガスの吸入を避ける。
  - : 漏えいガスを止められない場合は、風下の人を退避させ、風通しの良い安全な場所に避難する。
  - : 必要に応じて陽圧式空気呼吸器と適切な保護具を着用する。
  - : 液化ガスが直接身体に触れると凍傷を起こす。
  - : 取り扱う時は、乾いた革手袋を着用する。
  - : 漏洩、噴出した液化ガスが気化した時、酸素濃度が急低下し、酸欠の危険性が極めて高くなる。
  - : 空気より重く、低い所に滞留し高濃度になりやすいので注意が必要である。
- 環境に対する注意事項 : 環境中への放出を避ける。
- 封じ込め及び浄化の方法及び機材

- 二次災害の防止策
- : 換気を良くし、速やかに大気中に拡散、希釈させる。
  - : 危険でなければ漏れを止める。
  - : 周辺での着火源(高温物、火花、裸火、電気を含む火気等)の使用を禁止する。
    - 禁煙。
  - : ガスの供給を絶つ。
  - : 窒息性、麻酔作用を持つガスであるため、漏洩したガスが滞留しないように換気を良くする。
  - : 大量の漏洩が続くようであれば、周囲をロープなどで囲み、立入禁止とする。

## 7. 取扱い及び保管上の注意

### 取扱い

#### 技術的対策（局所排気、全体換気等）

- : 凍結により容器の弁が手で開かない時は、水をかけて温める。
- : 高濃度のガスを吸入すると、窒息、眠気又はめまいのおそれがある。ばく露を防止するため、換気を行う。

#### 安全取扱い注意事項

- : 使用するガス関連機器の取扱説明書を入手する。
  - : すべての安全注意項目を読み理解するまで取り扱わない。
  - : 容器は転倒、転落等を防止する措置を講じ、粗暴な扱いはしない。
  - : 空気より重く、低い所に滞留しやすい。
  - : 周辺での着火源(高温物、火花、裸火、電気を含む火気等)の使用を禁止する。
    - 禁煙。
  - : 静電気対策を行い、作業服、作業靴は帯電防止のものを用いる。
  - : 容器を熱すると爆発のおそれがある。
  - : 容器の取り付け・取り外し及びガスの使用にあたっては、ガスを漏らさないように注意し、漏れ検査は適切な検知剤・ガス検知器を使用する。
  - : 使用後は、バルブを完全に閉め保護キャップを取り付ける。
  - : 漏洩すると、発火・爆発する危険性がある。
  - : ガスが漏れても被害を最小限度にするために、消火器を常備する。
  - : 密閉したり、換気の悪い場所で取扱わない。万一このような状態で使用する場合は、酸素濃度が18%を下回らないように測定管理する。
  - : 環境への放出を避ける。
  - : 液化ガスを配管内で閉塞させない。液膨張、気化膨張により配管を破壊するおそれがあり、極めて危険である。
  - : 液化ガスや断熱していない配管に直接接触すると凍傷を起こす。
  - : 液化ガスが常温のものと接触すると沸騰し、飛沫が生じて危険である。
  - : 容器付属品を操作しない。
  - : 弁の開閉に使用するハンドルは所定の物を使用し、ゆっくりと静かに開ける。
  - : 設備の修理をする時は、不活性ガス又は空気によく置換をしてから行う。
- 接触回避
- : 裸火や300～400℃以上の高温熱源に接触すると熱分解し、毒性ガスを発生する可能性がある。
  - : アルカリ金属、アルカリ土類金属、マグネシウム合金（2%以上）、粉末アルミニウム、亜鉛等。詳細については、「10.安定性及び反応性」を参照。
  - : 液状で噴出するガスには触れない。

### 保管

#### 安全な保管条件

#### 適切な技術的対策

- : 高圧ガス保安法の規制に従う。
- : 容器は40℃以下の風通しの良い場所で保管し、腐食性の雰囲気や連続した振

動にさらされないようにする。

- : 容器は保護キャップを装着し、支燃性ガス、毒性ガスと区分して容器置場に保管する。
- : 周辺での着火源(高温物、火花、裸火、電気を含む火気等)の使用を禁止する。一禁煙。
- : 容器は若干の残圧を残した状態で消費を止める。契約に示す期間を経過した容器及び使用済みの容器は、速やかに販売者に返却する。
- 混触危険物質 : 裸火、高温熱源、アルカリ金属、アルカリ土類金属、マグネシウム合金(2%以上)、粉末アルミニウム、亜鉛等。
- : 詳細については、「10. 安定性及び反応性」を参照。
- 安全な容器包装材料 : 高压ガス保安法で規定されている容器。

## 8. ばく露防止及び保護措置

- 設備対策 : 屋内で使用する場合は、換気を良くする。
- : ガスが漏れいし、滞留するおそれのある場所には、爆発下限値の1/4以下で警報を発するガス漏洩検知警報器を設置する。
- : 防爆仕様の機器を設置する。
- : 静電接地を行う。
- 許容濃度
- 日本産業衛生学会 : 未設定(2014年度版)。
- ACGIH : 未設定(2009年度版)。
- 保護具
- 呼吸用保護具 : 必要に応じて、陽圧式空気呼吸器を使用する。
- 手の保護具 : 使用形態に応じた手袋を着用する。
- 眼の保護具 : 使用形態に応じた保護眼鏡を着用する。
- 皮膚及び身体の保護具 : 使用形態に応じた作業服を着用する。
- : 袖及びズボンの裾より肌を露出しない。

## 9. 物理的及び化学的性質

- 外観(物理的状態、形状、色など)
  - : 液化ガス
  - : 無色
- 臭い : 僅かなエーテル臭
- pH : データなし
- 融点・凝固点 : -117℃
- 沸点、初留点及び沸騰範囲 : -25℃
- 引火点 : <-50℃
- 燃焼又は爆発範囲の上限・下限
  - : 3.6~19.6vol%
- 蒸気圧 : 0.6MPa(25℃)
- 液密度 : 0.91g/cm<sup>3</sup>
- 蒸気密度 : 3.04kg/m<sup>3</sup>(0℃)
- 比重(相対密度) : 2.4(空気=1, 25℃)
- 溶解度 : 0.28wt%(25℃)
- n-オクタノール/水分係数

	: log Pow=0.75
自然発火温度	: 454℃
分解温度	: 300～400℃以上
その他のデータ	
粘度	: 0.16 m Pa·s(25℃)
分子量	: 66.1
最小着火エネルギー	: データなし

## 10. 安定性及び反応性

反応性	: データなし
化学的安定性	: 高温の物体との接触、火花又は裸火により発火する。
危険有害反応可能性	: 加熱又は燃焼すると分解し、フッ化水素などの有害なものが発生する。 : 空気、酸素と反応して、火災や爆発の危険をもたらす。
避けるべき条件	: 高温の物体、火花、裸火、静電気。
混触危険物質	: 裸火、高温熱源、アルカリ金属、アルカリ土類金属、マグネシウム合金(2%以上)、粉末アルミニウム、亜鉛等。
危険有害な分解生成物	: 熱分解すると、腐食性の強いフッ化水素、フッ化カルボニル等の毒性ガスを生じるおそれがある。

## 11. 有害性情報

急性毒性 吸入(ガス)	: ラットを用いた4時間吸入ばく露試験において319000 ppm以下の濃度では死亡はなく、383000ppmでは1/6例、437500 ppmで2/6例がそれぞれ死亡し、おおよその致死濃度(ALC)は383000ppmと推定されている(SIDS(2006))ことに基づき、区分外とした。
経口	: ラット ALD>1500 mg/kg
経皮	: データなし
皮膚腐食性及び皮膚刺激性	: データなし
眼に対する重篤な損傷性又は眼刺激性	: データなし
呼吸器感作性又は皮膚感作性	: データなし
生殖細胞変異原性(変異原性)	: ラットの吸入投与による骨髄細胞用いた小核試験(体細胞 in vivo 変異原性試験)(OECD TG 474)で陰性の結果(SIDS(2006))にもとづき区分外とした。なお、in vitro 変異原性としてAmes試験(OECDTG 471、GLP 準拠)で陰性、ヒトリンパ球を用いる染色体異常試験(OECD TG 473)で弱陽性の報告がある(SIDS(2006)、PATTY(5th, 2001))。
発がん性	: 日本産業衛生学会(2004年度)、ACGIH(2005年度)、NTP(2001年度)、IARC(2000年度)いずれにも発がん性物質としてリストされていない。
生殖毒性	: データなし
特定標的臓器毒性(単回ばく露)	: 数人のボランティアが50%濃度の本物質のばく露を数分間受け、心地よい無痛覚と切迫した意識消失を呈したことにより、麻酔作用を有すると報告されている(PATTY(5th, 2001))。また、動物試験ではラットに吸入ばく露により、し眠、音への無反応、正向反射の消失などが認められている(SIDS(2006))。

これらのヒトおよび動物における所見に基づき、区分3(麻酔作用)とした。

特定標的臓器毒性 (反復ばく露)

: ラットに 100,000ppm/16h (90日換算:108,866ppm/6h) を2ヵ月間吸入ばく露した試験において、一般状態および剖検とも悪影響はなかったが、組織学的検査で軽度ながら大小の円形細胞のびまん性浸潤が認められた (SIDS (2006))。また、100,000ppm/6h を2週間吸入ばく露により、ばく露中に睡眠と音に対する無反応が現れ、麻酔状態に見えた他には影響が見られなかった (SIDS (2006))。これらの影響はガイダンス値範囲を超えた濃度での所見であり、また、試験自体も検査項目数が少ないことや雄のみの試験であるなど完全な反復ばく露の試験ではないことから、データ不十分と判断され「分類できない」とした。

吸引性呼吸器有害性

: データなし

その他の情報

: 液化ガスが眼に入ると失明のおそれ。

: 凍傷。

: 空気と置換することにより単純窒息性ガスとして次のような作用をする。

空気中の酸素濃度 (%)	酸素欠乏症の症状等
18	安全下限界だが、作業環境の連続換気、酸素濃度測定、安全帯等、呼吸用保護具の用意が必要。
16~12	脈拍・呼吸数増加、精神集中力低下、単純計算まちがい、精密筋作業拙劣化、筋力低下、頭痛、耳鳴、悪心、吐気、動脈血中酸素飽和度 85~80% (酸素分圧 50~45mmHg) でチアノーゼがあらわれる。
14~9	判断力低下、発揚状態、不安定な精神状態(怒りっぽくなる)、ため息頻発、異常な疲労感、酩酊状態、頭痛、耳鳴、吐気、嘔吐、当時の記憶なし、傷の痛み感じない、全身脱力、体温上昇、チアノーゼ、意識もうろう、階段・梯子から墜落死、溺死の危険性。
10~6	吐気、嘔吐、行動の自由を失う、危険を感じても動けず叫べず、虚脱、チアノーゼ、幻覚、意識喪失、昏睡、中枢神経障害、チェーンストークス型の呼吸(ゆっくりした、深い呼吸)出現、全身けいれん、死の危機。
6以下	数回のあえぎ呼吸で失神・昏倒、呼吸緩除・停止、けいれん、心臓停止、死。

12. 環境影響情報

生態毒性

: QSAR による推算値が、魚類の 96 時間 LC50=733 mg/L、甲殻類の 48 時間 EC50=720 mg/L、藻類の 96 時間 EC50=419 mg/L (いずれも SIDS, 2007) であり、これらは QSAR による推定値であるが、SIDS で引用されておりこの推定値は信頼してよいこと、実測値入手は困難であることから区分外とした。

: 難水溶性ではなく (水溶解度: 3,200mg/L (PHYSPROP Database, 2009))、急性毒性区分外であることから、区分外とした。

残留性・分解性

: データなし

生体蓄積性

: データなし

土壌中の移動性

: データなし

オゾン層への有害性

: オゾン層破壊係数=0



他の有害性 : 地球温暖化係数=124(CO2を1.0とする。100年積分値、IPCC第4次レポート)

### 13. 廃棄上の注意

残余廃棄物 : 使用済み容器は、残ガスを廃棄せず、そのまま販売者に返却する。  
: 環境へのガスの放出は避ける。

汚染容器及び包装 : 容器の廃棄は容器所有者が行い、使用者が勝手に行わない。

### 14. 輸送上の注意

#### 国際規制

国連番号 : UN1030  
品名(国連輸送名) : 1,1-ジフルオロエタン  
国連分類 : 区分2.1(引火性ガス)  
容器等級 : -  
海洋汚染物質 : 非該当  
MARPOL条約によるバラ積み輸送される液体物質 : 非該当

海上規制情報 : 国際海事機関(IMO)の規定に従う。  
航空規制情報 : 国際民間航空機関(ICAO)の規定に従う。

#### 国内規制

陸上規制情報  
高圧ガス保安法 : 法第23条(移動)、一般高圧ガス保安規則第48条(移動に係る保安上の措置及び技術上の基準)  
消防法 : 危険物の規制に関する政令第29条6項(積載方法)、危険物の規制に関する規則第46条(混載を禁止される物質)  
毒物劇物取締法 : 非該当  
道路法 : 法第46条(通行の禁止又は制限)、施行令第19条の13(車両の通行制限)

海上規制情報  
船舶安全法 : 法第28条(危険物等の規制)、危険物船舶運送及び貯蔵規制第2条(用語)、同規則第3条(分類等)、船舶による危険物の運送基準等を定める告示別表第1;UN1030  
港則法 : 法第21~23条(危険物)、施行規則第12条(危険物の種類)、港則施行規則の危険物の種類を定める告示;高圧ガス

航空規制情報  
航空法 : 法第86条(爆発物等の輸送禁止)、施行規則第194条(輸送禁止の物件)、航空機による爆発物等の輸送基準等を定める告示別表第1;UN1030

#### 輸送又は輸送手段に関する特別の安全対策

: 支燃性ガスと混載する時は、容器弁の方向を反対にむけるか、間隔を十分にとる。  
: 容器を車両に積載して輸送する時は、車両の見やすい所に「高圧ガス」の警戒標を掲げ、消火器、防災工具等を携行しなければならない。  
: 車両等によって運搬する場合は、荷送人は運送人にイエローカードを携帯させる。  
: 輸送する時は、運転席から独立した荷台に積載する。  
: 容器は漏れのないものを積み込み、転倒、転落、衝撃等を避けるべく荷崩れ

の防止を確実に行う。

: 容器を移動する時は、保護キャップを装着する。

: 容器は40℃以上にならないように、温度上昇防止措置を行う。

緊急時応急措置指針番号 : 115

## 15. 適用法令

化学物質排出把握管理促進法（PRTR制度）

: 非該当

労働安全衛生法 : 規則第24条の14(表示)、15(交付)

毒物及び劇物取締法 : 非該当

高圧ガス保安法 : 法第2条(液化ガス)

消防法 : 法第10条(位置)、法第16条(積載方法及び運搬方法)

道路法 : 14. 輸送上の注意の通り。

船舶安全法 : 14. 輸送上の注意の通り。

港則法 : 14. 輸送上の注意の通り。

航空法 : 14. 輸送上の注意の通り。

その他の法令 : フロン類の使用の合理化及び管理の適正化に関する法律第2条

## 16. その他の情報

引用文献

1) 職場のあんぜんサイト (GHS 対応モデルラベル・モデル SDS 情報)

: 厚生労働省 ([http://anzeninfo.mhlw.go.jp/anzen\\_pg/GHS\\_MSD\\_FND.aspx](http://anzeninfo.mhlw.go.jp/anzen_pg/GHS_MSD_FND.aspx))

2) 高圧ガスハンドブック : 日本産業・医療ガス協会

3) 緊急時応急措置指針 : 日本規格協会

4) 新酸素欠乏危険作業主任者テキスト H20. 12. 15

: 中央労働災害防止協会

5) 国際化学物質安全性カード (ICSC)

: 国立医薬品食品衛生研究所 (<http://www.nihs.go.jp/ICSC/>)

6) GAS ENCYCLOPEDIA : L' AIR LIQUIDE

7) GAS DATA BOOK : MATHESON GAS PRODUCTS

8) NITE-化学物質管理分野

: 製品評価技術基盤機構 (<http://www.safe.nite.go.jp/>)

記載事項の取扱い

: この安全データシートの記載内容は、現時点で入手できた資料や情報に基づいて作成しておりますが、記載のデータや評価に関しては、情報の完全さ、正確さを保証するものではありません。

: 記載事項は通常の手続きを対象にしたものでありますので、特別な取扱いをする場合には、新たに用途・用法に適した安全対策を実施の上、ご利用ください。

: すべての化学製品は「未知の危険性、有害性がある」という認識で取り扱うべきであり、その危険性、有害性も使用時の環境、取扱い方、保管の状態、及び期間によって大きく異なります。ご使用時はもちろんのこと、開封から保管、廃棄に至るまで、専門知識、経験のある方のみ、又はそれらの方々の指導のもとで取扱いすることを推奨します。

フルオロカーボン152a 岩谷瓦斯(株) SF-09 11/11  
作成日 1994年 1月 11日  
改訂日 2015年10月 1日

: ホームページ等への転載、当製品をご使用にならない方への提供をお断りします。